The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 定家の百首歌における「有明」 : 四季歌を中心に |
| Author(s) | 細川, 知佐子 |
| Citation | 詞林. 2004, 35, p. 100-111 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/67519 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 定家の百首歌における「有明」

## ―四季歌を中心に―

細川　知佐子

### はじめに

「有明」は、明け方になっても空に残る月のこと（以下、一日意識の「有明」とする）をいうが、『能因歌枕』広本に、「晦ありあけといふ」「廿月ヨリありあけ」と記され、『袖中抄』には、「下旬をばおしなべて有明」[1]と書かれているように、月の二十日以後、下旬の月（以下、月齢意識の「有明」とする）でもある。つまり、一つの詞に二つの意味が含まれている歌語である。

全ての勅撰集で詠まれ、詠歌数は『詞花和歌集』までは、僅かであるが、『千載和歌集』二一首、『新古今和歌集』では四二首と倍増している[2]。「有明」が、急激な増加を見せる新古今時代は、百首歌の時代でもあった。後鳥羽院歌壇では、「正治初度百首」を皮切りに百首歌が催され、『新古今和歌集』の有力な撰歌資料となり、当時の歌人たちにとって百首歌を詠むことは最重要課題となった。

この百首歌を詠む際、「有明」の有する二つの意味のうち、二十日以後の月であることは、部立内部に時間の経過を有する四季歌や恋歌の中で、その時間経過を示す有効な歌語となり得るのではないだろうか。

本稿では、月齢意識の「有明」が百首歌の四季あるいは恋の歌を詠む際、有効に働く可能性があることを踏まえ、新古今時代を代表する歌人である藤原定家の百首歌における「有明」が、一日意識、月齢意識のどちらにより重点を置いて詠まれたかを考察する。なお、百首歌において、部立内部に時間経過を有するのは四季歌と恋歌であるが、本稿では主として、定家の詠歌数の多い四季歌を考察対象とし、また部立内部に時間経過を有しない雑歌は対象外とする。

### 一　組題百首と部立百首

まず、定家が百首歌で「有明」を実際どのように使っているかについて、数を確認し概観する。定家の時代の百首歌を大別すると、組題百首と部立百首の二つに分けることができ、定家の家集『拾遺愚草』『拾遺愚草員外』所収の百首歌を分

類すると、以下に示す表一・表二となる。

組題百首は寿永元年（一一八二）二十一歳の「堀河題百首」から、部立百首は養和元年（一一八一）二十歳の「初学百首」から詠歌年順に表を作成した。但し、特殊な構成の「花月百首」「関白左大臣家百首」「四季題百首」と、内部に時間経過を有しない歌題からなる「十題百首」は除外した。

表一にあるように、定家は組題百首を九回詠んでおり、その中で「有明」は四首に詠まれている。四季と雑でそれぞれ二首詠まれているが、恋では一首もみられない。本稿で注目する四季歌では、建久四年（一一九三）に九条家の良経主催で行われた「六百番歌合」の秋「暮秋」題と、建保六年（一二一八）に詠じた「韻字四季歌」の句題「孤燈背壁暁夢断、急雨灑窓陽景残」[3]で詠んでいる。「六百番歌合」の歌題「暮秋」は、秋の最後の歌題であり、月が秋の景物であること、「九月尽」のように限られた一日を詠むものでないことから、月の終わりを表す「有明」が秋の終わりという題の本意に適うものとして詠まれたと考えられ、ここでの詠歌は月齢意識によることが分かる。もうひとつの「韻字四季歌」では、句題に含まれる「暁」から「有明」が詠まれたもので、一日意識によるものである。しかし、組題とはいえ、二句からなる漢詩句を歌題としていることは特殊であり、また定家自身が「試にかきならべ」た「いたつら事」と書いている[4]ことからも、例外的なものと考えられる。つまり、組題百首の四季歌

【表一】定家の組題百首における「有明」の詠歌数と歌題
※「藤川百首」は新編国歌大観に拠る。

| 百首歌 | 数 | 部立 | 「有明」が詠まれた歌題 |
|---|---|---|---|
| 堀河題百首<br>寿永元年（一一八二） | 1 | 雑1 | 「山家」 |
| 早率露胆百首「堀河題」<br>文治五年（一一八九） | 0 | | |
| 重奉和早率「堀河題」<br>同右 | 0 | | |
| 一句百首<br>建久元年（一一九〇） | 0 | | |
| 六百番歌合<br>建久四年（一一九三） | 1 | 秋1 | 「暮秋」 |
| 内大臣家百首<br>建保三年（一二一五） | 0 | | |
| 韻字四季歌<br>建保六年（一二一八） | 1 | 秋1 | 「孤灯背壁暁夢断、急雨灑窓陽景残」 |
| 文集百首<br>同右 | 0 | | |
| 藤川百首<br>詠歌年次不明 | 1 | 雑1 | 「月羇中友」 |
| 合計 | 4 | 四季2<br>雑2 | |

【表二】定家の部立百首における「有明」の詠歌数

| 百首歌 | 数 | 「有明」が詠まれた部立 |
|---|---|---|
| 初学百首<br>養和元年（一一八一） | 2 | 冬1<br>雑1 |
| 二見浦百首<br>文治二年（一一八六） | 2 | 秋2 |
| 大輔百首<br>文治三年（一一八七） | 1 | 秋1 |
| 閑居百首<br>同右 | 2 | 冬1<br>恋1 |
| 一字百首<br>建久元年（一一九〇） | 2 | 秋1・冬1 |
| 正治初度百首<br>正治二年（一二〇〇） | 3 | 春1・夏1<br>雑1 |
| 千五百番歌合<br>建仁元年（一二〇一） | 2 | 夏1<br>雑1 |
| 内裏名所百首<br>建保三年（一二一五） | 2 | 冬1<br>雑1 |
| 院百首　建保<br>建保四年（一二一六） | 2 | 春1・夏1 |
| 合計 | 18 | 四季13<br>恋1<br>雑4 |

は「六百番歌合」の「暮秋」題一首のみであり、ここでの「有明」は、月齢意識によって使用されていることが分かる。なお、「六百番歌合」については、後述する。

次に部立百首を示した表二を参照する。組題百首とは明らかに異なり、全ての百首歌で「有明」を詠んでおり、数量的にも「初学百首」から「院百首　建保」まで、ほとんど差はみられない。また四季歌では必ず「有明」を詠んでいるのに対して、恋歌では、「閑居百首」一首のみであり、百首歌の恋歌では、「有明」をほとんど使っていないことが分かる。

以上、表一と表二から、同じ百首歌でも、組題百首と部立百首では、「有明」の詠歌数に明確な相違があることが分かった。どちらも百首歌を九回詠んでいるが、四季歌における詠歌数は、組題百首の二首に比べ、部立百首では一三首となっている。組題百首と部立百首はほぼ同時期に並行して詠まれており、どちらか一方が、若年期のもので、もう一方が老年期に詠まれたというような偏りはなく、数の違いは年代によるものとは考え難い。またそれぞれを詠歌年次の順にみても、初学期から老年の建保期の百首歌まで、数に差はみられない。詠歌数の相違は、組題百首と部立百首の性格の違いによるものと考えるのが妥当であろう。その違いとは、組題百首には百の歌題が設定されているが、部立百首にはそのような歌題は設定されていないということである。組題百首の規範とされている「堀河百首」を例に挙げると、春は「立

春」から始まり、「子日」「霞」「鶯」～「三月尽」と、季節の推移に沿って歌題が設定されており、与えられた歌題に忠実に詠んでいけば自ずと季節の流れを詠んでいくことができる。そのため、月齢を伴う歌語「有明」を敢えて読み込む必要がなかったのではないだろうか。一方、部立百首では、歌人それぞれが春十五首、夏十首のように、定められた詠歌数の中で春や夏の季節の流れを表現しなければならず、このような場合、それぞれの季節の中に月の下旬を示す「有明」が詠み込まれていれば、月の終わりや、季節の終わりが表現できる。このような理由から、組題百首と部立百首の詠歌数に大きな違いが生じたと考えられる。

このことを踏まえ、組題百首と部立百首における「有明」の詠歌数の違いが、定家だけにみられるものか、他の歌人との比較を通して検討したい。ここでは、定家と共に多数の百首歌を詠じている家隆と比較する。家隆の組題百首と部立百首における「有明」の使用状況を表三と表四に示す。

一見して、組題百首と部立百首との間に定家のような違いはみられない。最も多く「有明」を詠んでいるのは、表三の「後度百首」における七首であり、そのうち六首までが四季歌である。堀河題の百首歌で、家隆が「有明」を用いている歌題をいくつか挙げると、「初心百首歌」では、秋の「槿」「九月尽」、「後度百首」では、夏の「照射」や秋の「月」、冬の「寒蘆」と様々な歌題で詠んでいることから、家隆も定家と同様、「有明」を月齢意識で用いていることは明白である。しかし、同じ秋歌の中で、早朝に開花し、名前に「あさ」を含むことから、一日意識の歌題とみなし得る「槿」でも「有明」を詠んでおり、月齢意識の「暮秋」題のみでしか用いていない定家の態度と大きな違いが見られる。数量的には、「後度百首」の突出した詠歌数を除くと、家隆の場合、組題百首と部立百首の間に、これと

【表三】家隆の組題百首における「有明」の詠歌数と歌題

| 百首歌名 | 数 | 部立 | 「有明」が詠まれた歌題 |
|---|---|---|---|
| 初心百首歌「堀河題」 | 4 | 秋2<br>雑2 | 秋「槿」「九月尽」<br>雑「鶴」「旅」 |
| 後度百首「堀河題」 | 7 | 夏1<br>秋2<br>冬3<br>雑1 | 夏「照射」<br>秋「月」「擣衣」<br>冬「寒蘆」「水鳥」「炉火」<br>雑「海路」 |
| 六百番歌合 | 1 | 夏1 | 「夏夜」 |
| 内大臣家百首 | 0 | | |
| 家百首 | 0 | | |
| 九条前内大臣家百首 | 1 | 冬1 | 「冬里月」 |
| 合計 | 13 | | 四季10<br>雑3 |

【表四】家隆の部立百首における「有明」の詠歌数

| 百首歌 | 数 | 「有明」が詠まれた部立 |
|---|---|---|
| 大輔百首 | 3 | 秋1<br>恋2 |
| 閑居百首 | 3 | 秋2<br>恋1 |
| 正治初度百首 | 1 | 冬1 |
| 千五百番歌合 | 1 | 恋1 |
| 内裏名所百首 | 1 | 秋1 |
| 院百首　建保 | 1 | 夏1 |
| 為家卿家百首 | 3 | 春1・冬1<br>恋1 |
| 合計 | 13 | 四季8<br>恋5 |

いった相違は見出し難い。恐らく「有明」に対して特別な意識を持たずに詠めば、このような結果になると思われる。つまり、定家にみられる組題百首と部立百首における明らかな詠歌数の相違には、自覚的な詠み分けがあったと考えられる。

## 二　部立百首四季歌の「有明」

次に、定家の部立百首四季歌での「有明」を詳しくみていきたい。四季歌の春夏秋冬それぞれの月の歌の中で、「有明」を詠んだ歌が、どの位置に置かれているかを表五にした。

いくつかの例外はあるものの、概して月の歌の最後に「有明」が置かれていることが分かる。月は秋の景物であるため、部立百首の秋では、連続して数首の月の歌が詠まれることが多い。その場合、定家はほとんど月の歌の最後に「有明」を使っている。秋以外の季節では、月の歌そのものが少なく、また必ずしも連続していないが、そのような場合でも最後に「有明」の歌を置いている。それぞれの季節の中で「有明」が最後の月となっているのである。また「内裏名所百首」の冬のように月の歌が、「有明」を詠み込んだ一首しかない場合には、季節の最終歌となっている。※印を付した、「有明」が月の歌の最後に置かれていない例外は四例ある。そのうち「一字百首」「正治初度百首」「院百首　建保」の三例は、同一の百首歌四季歌の別の季節にも「有明」を用いており、月の歌の最後が「有明」という、同趣向の重複を避けたものと考えられる。残る一例は、「千五百番歌合」の夏の歌である。月を詠んだのは次の二首で、

袖の香を花橘におどろけば空に有明の月ぞのこれる

（四百四十六番右・八九一／拾遺愚草・一〇三〇）

夏の月はまだよひのまとながめつつぬるや川辺のしののめの空

（四百八十八番右・九七五／拾遺愚草・一〇三三）

【表五】部立百首四季歌の「有明」
―月の歌の中での位置―
※は「有明」が月の歌の最後に置かれていないもの

| 百首歌 | 月の歌の中での配列 |
|---|---|
| 初学百首 | 冬　三首中最後 |
| 二見浦百首 | 秋　九首中最後 |
| 大輔百首 | 秋　五首中最後 |
| 閑居百首 | 秋　四首中最後 |
| 一字百首 | 秋　六首中最初※<br>冬　二首中最後 |
| 正治初度百首 | 春　四首中三首目※<br>夏　三首中最後 |
| 千五百番歌合 | 夏　二首中一首目※ |
| 内裏名所百首 | 冬　一首（冬の最終歌） |
| 院百首　建保 | 春　二首中最後<br>夏　三首中二首目※ |

二首目の結句は「しののめの空」となっている。「有明」という語を使ってはいないものの、「有明」の月の後に置かれた二首目の月も、有明の月の情景を詠んでいるのである。いずれにしても、この「千五百番歌合」以外の全ての百首歌では、最後の月を「有明」とする趣向を、必ず行なっている。

組題百首と部立百首で、自覚的に詠み分けられた「有明」は、部立百首において、月齢意識をもって、月の歌の最後に使われたことが明確となった。

では部立百首において、このように歌語「有明」を月齢意識で用いるという態度が、定家独自のものであるかを探るため、次に建久元年（一一九〇）良経家で催された「花月百首」をみていきたい。現在明らかとなっている出詠歌人は六人だが、百首全てが残されているのは、定家以外では良経、慈円のみであるため、この両者の態度と比較してみたい。「花月百首」は、所謂部立百首ではないが、春と秋の季節の流れに沿って「花」題で五十首、「月」題で五十首が詠まれ、一つの季節の流れが表現されているので、「有明」がどのように使われているかをみるのに有効だと思われる。それぞれの月五十首における、「有明」を詠んだ歌のみを列記した。歌頭の番号は月五十首での番号である。まず定家だが、「有明」を四首詠んでいる。

一八　関の戸を鳥の空ねにはかれども有明の月は猶ぞさしける　（拾遺愚草・六六八）

三〇　秋の夜の有明の月の月影はこの世ならでも猶やしのばん　（同・六八〇）

四九　あぢきなくもの思ふ人の袖の上に有明の月の夜をかさねては　（同・六九九）

五〇　長月の月の有明の時雨ゆゑ明日の紅葉の色もうら

めし　（同・七〇〇）

四九番と五〇番は続けて置かれているので、三箇所に「有明」の歌が置かれたといえる。二八番歌に「あけば又秋のなかばも過ぬべし」と詠まれ、二九番が「駒迎」を詠んでいることから、三〇番の「有明」は八月の下旬の月のことであろう。すると、一八番はおそらく七月の下旬の「有明」となろう。五十首という通常詠むことのない月歌の連作ということで、一八、三〇、四九番とほぼ等間隔で、「有明」を複数詠んだのであろうが、月齢にこだわるあまりの構成といえる。最後の五〇番で単なる「有明」ではなく「長月の月の有明」と詠んでいるのも、文月、葉月、長月それぞれの「有明」を詠んだために、詠み込まれたものであると考えられる。ここでも、最後の月は「有明」であることを確認しておきたい。

次に良経の歌を挙げる。

三六　秋ぞかしこよひばかりの寝覚めかは心つくすな有明の月　（秋篠月清集・八六〇）

四一　うきよいとふ心の闇のしるべかな我が思ふかたに有明の月　（同・九一一）

四八　有明になりゆく月をながめても秋の残りをうちかぞへつつ　（同・九八〇）

四九　ながの月の有明の月の明け方を誰待つ人のながめわぶらむ　（同・九九〇）

数は四首で、定家と同数である。少し間隔が空いているが、四首全てが五十首の後半に置かれている。定家のように「駒迎」の歌がなく、三六番の歌が何月の「有明」を指すのか定かでないが、四八・四九番で「有明」を詠んでいるので、月齢意識を持って使用していることは明らかである。但し、五〇番の歌に「有明」は詠まれておらず、「有明」が月の歌を締めくくる最後の月とはなっていない。

続いて慈円の歌を挙げる。

三八　有明の月の行方をながめてぞ野寺の鐘はきくべかりける　（拾玉集・一三九一）

四〇　月よりも猶すみまさる心かな一人寝覚めの有明の月　（同・一三九三）

四二　さえわたる月に心のかよふかな浜名の橋の有明の空　（同・一三九五）

四三　入りぬれど涙の露に影とめて月はたもとに有明の空　（同・一三九六）

ここでも四首詠まれている。六番で「駒迎」が詠まれ、八番歌では「長月」と詠まれていることから、全て長月の「有明」だと思われる。最後にまとまっておかれており、やはり月齢意識で用いていると思われるが、「有明」の後にも多くの月の歌が続いている。

以上「花月百首」の月五十首から、良経、慈円も月齢意識で「有明」を詠んでいることが分かった。建久元年という詠歌年次から、定家の「有明」への月齢意識が、良経、慈円に

影響を与えたことは充分考えられるが、この時点で、定家だけでなく、良経、慈円も月齢意識をもって、「有明」を詠んでいたこと、しかしながら定家のそれは、季節の最後の月として、より徹底したものであったことを確認しておく。

## 三　「六百番歌合」の「有明」

ではここで、定家が組題百首の四季歌で、「有明」を用いた「六百番歌合」をみていくこととする。定家が「暮秋」という秋最後の歌題で「有明」を詠んでいることを先述したが、他の出詠歌人たちがどのような歌題で「有明」を用いているかをみていくことにより、一日意識、月齢意識のいずれの使い方によるものか確認したい。次の表六が出詠歌人全ての「有明」を詠んだ歌の題である。

四季五十首、恋五十首で構成されている「六百番歌合」では、季経、顕昭の二人を除き、出詠歌人十二人中十人が「有明」を詠んでいる。またその十人中、経家以外は四季歌に「有明」を用いている。次に、四季歌において「有明」の詠まれた歌題を、三種に分類する。

一、月齢意識の歌題（春、秋、冬それぞれの季節の最後の歌題）―「残春」「暮秋」「仏名」

二、一日意識の歌題（一日の時間の中で捉えられた歌題）―「春曙」「夏夜」「秋霜」「冬朝」

三、一、二以外―「秋田」「鴫」

【表六】六百番歌合の「有明」―詠歌数と歌題―

| 歌人名 | 「有明」の詠歌数 | 部立と歌題 |
|---|---|---|
| 定家 | 1 | 秋「暮秋」 |
| 良経 | 3 | 秋「秋田」／恋「尋恋」「暁恋」 |
| 慈円 | 2 | 春「残春」／恋「寄関恋」 |
| 家隆 | 1 | 夏「夏夜」 |
| 季経 | 0 | |
| 経家 | 1 | 恋「寄月恋」 |
| 有家 | 3 | 春「春曙」秋「暮秋」／恋「暁恋」 |
| 隆信 | 2 | 秋「秋霜」冬「仏名」 |
| 顕昭 | 0 | |
| 寂連 | 2 | 秋「暮秋」冬「冬朝」 |
| 兼宗 | 1 | 秋「暮秋」 |
| 家房 | 1 | 秋「鴫」 |
| 合計 | 17 | 四季12<br>恋5 |

以上、これを踏まえて、歌人たちがどのような意識で「有明」を用いたかみていきたい。

まず、一の四季歌を月齢意識の歌題のみで詠んでいるのは、定家、慈円、兼宗である。但し、慈円は「寄関恋」でも詠ん

でおり、「花月百首」同様、定家ほど厳密な姿勢ではない。兼宗は『千載集』にも入集している勅撰歌人ではあるが、家集は伝存せず、これだけで常に「有明」を月齢意識のみで用いていたと断じることはできない。二の四季歌を一日意識の歌題のみで詠じているのが家隆である。次に四季歌を一日意識と月齢意識両方で詠んでいるのは、「春曙」と「暮秋」の有家、「秋霜」と「仏名」の隆信、「暮秋」と「冬朝」の寂連の三人である。いずれも「暮秋」や「仏名」といった季節の終わりに「有明」を詠む一方で、「曙」「霜」「朝」といった明け方と結びついた歌題でも用いている。三の一日意識でも月齢意識でもない歌題で詠んだのは、良経、家房で、以上をまとめると、月齢意識を全く持たずに「有明」を用いているのは、家隆、良経、家房となる。しかし家隆は、先述した堀河題の「初心百首」での歌題「九月尽」で「有明」を詠んでいることから、常に一日意識のみで「有明」を用いていないことが分かる。良経については、「花月百首」では、月齢意識が確認できた。つまり、四季歌で「有明」を詠んだ歌人のほとんどが、「有明」に月齢意識を持っていたが、定家と兼宗を除き、一方では一日意識やそのような意識を伴わない使い方もしているのである。ひとつの百首歌の中でさえ、様々な使い方をしている歌人が多い中、すべての組題百首で、月齢意識による用い方にこだわる、頑固ともいえる定家の姿勢は、際立ったものといえよう。

## 四　定家以前の百首歌

勅撰集の中には、『拾遺和歌集』恋三の七八二番から七九六番や、『金葉和歌集二度本』秋の月の歌群一七四番から二一七番に、月齢による配列が見出せ、「有明」がそれぞれの終わり近くに置かれている。このような勅撰集からの直接的影響で、定家は月齢という役割を「有明」に与え、百首歌の四季歌で用いたのであろうか。

ここで、定家以前の百首歌での「有明」を確認してみたい。組題百首の始発である「堀河百首」四季歌を確認すると、夏の「郭公」、冬の「千鳥」という歌題で詠まれており、どちらも明け方の鳥の声との取り合わせで、一日意識しか窺えず、いずれも一首しか詠まれていない。「堀河百首」で最も多く「有明」が詠まれたのは、雑「暁」題の四首であり、以下「永久百首」は秋「暁月」の四首、「為忠家初度百首」では冬「暁天千鳥」の三首と、歌題に一日意識の「暁」を含むものばかりである。[5]

また、「為忠家後度百首」では、「有明月」が、歌題として設定されているが、歌題の配列は

月廿首

三日月　晩月　弦月　十五夜月　亭午月　伊佐与非月
立待月　居待月　寝待月　廿日月
木間月　露上月　在明月　山葉月　雲間月　朧月　雨

後月　水上月　閏中月　霜夜月

となっており、「露上月」と「山葉月」の間に置かれている。「三日月」から「二十日月」という月齢を表わす月の中には含まれておらず、情趣を伴う月の一様相として配列されている。ここから、先行の組題百首には、月齢意識による「有明」の詠歌例は見出せなかった。

では、先行する部立百首の「久安百首」をみてみよう。「有明」を詠んだ歌は十首みられ、四季歌は五首あるが、全て秋に詠まれている。この中で注目すべきものは、次に掲げる崇徳院と教長の「有明」である。

まず崇徳院の「秋」の月の歌七首、

秋来ればおもひなしかも夕月夜残りおほかるけしきなるかな　（三九）

をしみかね入ぬる夜半の月なれど猶面影はとどめおきけり　（四〇）

月清みゆるぎの杜にゐる鷺のたたずはよそにいかでわかまし　（四一）

玉よするうらわの風に空晴れて光をかはす秋の夜の月　（四二）

雲の波天の川瀬にたたねどもなにあらはれて澄める月かな　（四三）

ひたすらにいとひもはてじかばかりの月をもたてる此世なりけり　（四四）

秋なれど有明の月は夏の夜の望よりもみるほどなかりけり　（四五）

次に同じく教長の歌を挙げる。[6]

しらま弓はりてかけたる三日月はほどなくぞいるたかまどの山　（二三六）

数ならぬ我が身なれども月をみてあかぬや人におとらざるらん　（二三七）

げにやさは西に心ぞいそがるるかたぶく月も今はをしまじ　（二三八）

いにしへもたぐひはあらじ月影は又こん秋のこよひなりとも　（二三九）

くまもなく月すみわたる銀川なをだにかけじ雲のしらなみ　（二四〇）

わたつみの清き浜辺によるなみのよるともみえずてらす月影　（二四一）

かねてよりひるとみゆれば秋の夜のあくるもしらぬ有明の月　（二四二）

崇徳院は、月齢の早い、夕方に出る月である夕月夜から始めた月の歌を、有明の月で終わらせている。教長も同様に、三日月から始め、有明の月を最後に置いている。百首歌の中の「有明」が、月齢意識を持って詠み込まれたのは、この崇徳院と教長が最初の例といえよう。

以上、定家以前の百首歌における「有明」についてみてき

たが、組題百首の四季歌では、「暁」を含む歌題で一日意識により詠まれることがほとんどであること、部立百首においては、「久安百首」の秋の歌に、月齢意識で詠む崇徳院と教長の先行例のあることが分かった。「久安百首」は、定家の父俊成も出詠しており、[7]後白河院の命により、部類作業もしている。それ故、定家への影響は大きく、定家の最初の百首歌である「初学百首」の構成は「久安百首」を規範とするとされている。[8]よって、これまでみた定家の月齢意識による「有明」詠は、「久安百首」から摂取したと考えられる。

## おわりに

定家の百首歌四季歌における「有明」を考察してきた。組題百首では、「有明」の有する月齢が歌題の本意に適った「暮秋」題において、一首詠んでいるだけであったのに対し、部立百首では全ての百首歌で詠まれており、多くの場合季節の最後の月として、月齢が有効に使われていることが分かった。四季歌では明らかに、「有明」の有する二つの意味のうち、月齢意識で用いているのである。

「花月百首」や「六百番歌合」でみたように、同時代歌人たちが、月齢意識をもって詠みつつも、一方で一日意識による用い方をしているのに比べ、定家は百首歌の中で、徹底して「有明」の月齢にこだわっている。そこには、「有明」という一つの歌語を明確に規定して用いる定家の確固とした態度が窺える。初学期から老年の建保期までこだわり続けた定家の態度は、他の歌人と一線を画すものといえよう。

注

(1)『袖中抄』第十九「いさよふ月」の項に「下旬をばおしなべて有明、大方は十四五日より、月の入らぬ先に夜の明くるをば、皆有明の月と云べけれど、委くいへば廿日の後を云べきなり。」とある。

(2)細田恵子「八代集のありあけのイメージ」(『文学史研究』15 一九七四年七月)では、『国歌大観』を底本に『新古今和歌集』の「有明」の詠歌数を四一首とするが、『新編国歌大観』によると、四二首を数える。

「有明」については他に、宇佐美真「千載集、新古今集の有明歌」(『国語・国文解釈』十一月号 一九八九年)があるが、いずれも八代集や『千載和歌集』『新古今和歌集』における論考である。

(3)冷泉家本の句題二句目「急雨灑窓湯景残」を、赤羽淑編著『名古屋大学本拾遺愚草』(笠間書院 一九八二年)により、「雨灑窓陽景残」と改めた。

(4)『拾遺愚草員外』に「建保五年の事にや内裏に此韻の字を人に給て詩をつくるとつたへきゝてつれ〳〵なりしかは歌にも成なんやと試に書ならへて侍しいたつら事を思ひ出て」とある。

(5)注(2)細田論文に、勅撰集における同様の指摘がある。

(6)『新編国歌大観』所収の非部類本「久安百首」における教長の二三六番歌は、「しらま弓はりてかけたる暁はほどなくぞいるた

かまどの山」とあるが、「ま弓」「はりて」とあるところから、「三日月」を詠じたものと考えられるため、『久安百首校本と研究』（笠間書院　一九九一年）部類本（底本　今治市河野美術館本）により改めた。なお、『教長集』も「みかづき」とする。

（7）「久安百首」では、「有明」を長歌にのみ詠んでいる。俊成は、組題百首の「為忠家両度百首」にも出詠しているが、これらの百首歌にみられる俊成の態度や、定家との相違等については、稿を改めたい。

（8）久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会　一九七三年）第三篇「新風歌人の研究」

※引用本文

『拾遺愚草』…冷泉家時雨亭叢書第八巻『拾遺愚草上下』（朝日新聞社　一九九三年）

『拾遺愚草員外』…同九巻『拾遺愚草員外』（同　一九九五年）に拠る。

歌番号は特に断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。他の和歌本文は、全て『新編国歌大観』に拠った。なお、本稿の引用に際し、適宜、漢字表記に改め、濁点を私に付した。

『能因歌枕』…『日本歌学大系　第一巻』（風間書房　一九五七年）

『袖中抄』…『歌論歌学集成　第五巻』（三弥井書店　二〇〇〇年）

（ほそかわ・ちさこ　本学大学院博士後期課程）

**国際日本文学研究報告集**〈全3冊〉　伊井春樹編

**1　国際化の中の日本文学研究**

一　講演

二　シンポジウム「留学生にとっての日本文学」

三　海外における日本文学研究、日本文学の諸問題

**2　日本文学　翻訳の可能性**

一　シンポジウム「日本文学の魅力
—留学生にとっての日本文学研究」

二　シンポジウム「日本文学　翻訳の可能性」

三　翻訳に関する諸問題

四　パフォーマンスの翻訳の可能性
—歌舞伎文化とテキスト・俳諧・絵画—

五　日本古典文学翻訳データベース

**3　海外における源氏物語の世界—翻訳と研究—**

一　講演「『源氏物語』について
—カノン形成・ジェンダー・文化的記憶—」

二　シンポジウム「海外における源氏物語の世界
—翻訳と研究—」

三　海外における源氏物語の諸問題

A5版・平均三〇〇頁・各三九九〇円（税込）

風間書房・二〇〇四年三月より順次刊行中